

青葉通信

第25号

発行

社会福祉法人
中日新聞社会事業団
中日青葉学園
電話 0561(72)0134

4年ぶりに
復活!

青葉まつり



2019年から3年間、施設の中だけでのお楽しみ会だったため、青葉まつりをコロナ禍でどう復活させるか。ボランティアとして参加する学生や地域の皆さんと実行委員会をつくり、多くの意見を取り入れながら、知恵を絞った。招待する住民や来賓の数を少なくするとともに、集団になりやすい子どもたちの舞台発表も最低限に。また、ボランティアの皆さんには、抗原検査も行った。

トークショーには、元中日ドラゴンズ投手の川上憲伸さん、格闘家の大和哲也さんに登場いただき、大盛り上がり。多くの卒園生も来場し、職員たちと楽しく交流する姿も見られた。卒園生にとって施設はふるさとであると感じ、退園後の相談機能も求められていると改めて感じた。生き生きと活動する職員の姿も見られ、青葉まつりを復活させてよかったと心から思う。これからも、地域とともにある開かれた施設として、ウィズコロナで青葉まつりを開催していきたい。(阿尾)



卓球部

悔しさをバネに
掴んだ強さ

監督に就任し、初めての夏。これまで、練習では出来ていても、本番で力を発揮しきれず、共に悔しい思いをしてきた。今年は、普段の練習からプレッシャーをかけ、どんな状況でも思い切ったプレーができる自信をつけることを目標に、多くの方に協力を頂きながら準備してきた。昨年度の団体戦で悔しい経験をした部員と高校生を中心に、不利な状況でも、思い切ったプレーをする姿に、何度も目頭が熱くなった。団体戦で優勝、個人戦でも金銀銅3種類のメダル獲得と、努力が結果に結びついた実感が持てたのではないかなと思う。この仲間達との熱い経験を糧に、様々な事に挑戦していきいたい。(小宮)



ソフトボール部

小さなことから、
コツコツと

私がこの中日青葉学園に入社してから18年、間子どもたちとソフトボール指導を行ってきた。施設でソフトボールを行う子どもがほとんどで、子どもが初心者であり、グローブですらはめたことがない子も少なくない。私がソフト指導を行っていく際に一番大切にしていることは「ソフトボールを好きになってもいい」こと。人は好きなことには前向きに取り組むことができ、ボールが上手く捕れるようになり、監督に褒められたり、チームメイトから応援されることで自信へと繋がる。私はこれからも子どもたち一人ひとりが自信を持った人間になれるよう、ソフトボールを通じて、学んでもらい、育てていきたい。(園原)



夏の目的別活動

コロナ禍も2年半と長期化し、その間に実施する予定だった多くの行事が中止や規模縮小となりました。本来であれば、子ども達は、行事から数多くの経験をし、成長の糧としていたはずですが、その機会が奪われ続けていることは残念でなりません。この夏休み、今までの失われた機会を取り戻すべく、おおば館、わかば館ともに夏休み期間を利用して目的別活動を実施しました。特におおば館は、今年度からホーム自治を掲げたケアに切り替えたことから、各ホームで様々な泊りがけの活動が企画されました。



しかしながら、実施直前に複数の児童が新型コロナウイルス感染症に罹患するなどしたことから延期。夏休みも終盤の8月下旬に、内容を大きく変更し、映画鑑賞、園庭での流しそうめん、花火、水遊びなどを楽しみました。流しそうめんでは、子どもは、小学校から竹を提供して貰い、竹

を切ったり節を抜くなどの準備から参加。慣れない作業に苦戦しながらも笑顔で取り組むことができました。また両館合同の磯遊び体験も日帰りとなりましたが、福井県の常神(つねがみ)半島で実施することができました。子ども達は、職員と一緒に、素潜りや鉈突き、魚釣りなどを体験。普段の食事では目にしないカサゴ、キジハタなどの魚を捕まえ、翌日には夕食の唐揚げにするなど様々な体験につながりました。

コロナに負けない子ども達の笑顔に、来年こそは、コロナ禍前の目的別活動を実施したいと考えています。(武弘)



寺井学園長就任挨拶



7月から7代目学園長に就任しました。

中日青葉学園に入職して36年目を迎え、これほど長く勤めるとは思ってもみませんでした。思い起こせば入職前、北小学校で講師をしているときに中日青葉学園を知り、中日新聞の片隅に出ていた募集要項を見て応募し、働き始めました。虚弱児施設時代は、9割を超える不登校児と生活を共にし、いろいろな体験を積み重ねていきました。平成15年10月には複合施設

の立ち上げに携わり、紆余曲折しながら子どもと共に育ち合いました。30年間虚弱児施設と児童養護施設「あおば館」で勤めた後、平成29年4月から児童心理治療施設「わかば館」の施設長として勤めてきましたが、そろそろ身を引こうと思っていた矢先に学園長の話が舞い込み、戸惑いがあったことは確かです。

もう少し頑張ろうと考え直し、やり残したことはないだろうかと考えたところ、次の3つの事を取り組んでみようと考えました。まず第一に、職員の援助技術の底上げに力を注ぐこと。挨拶と声掛けがきちんとできるようにし、人との距離の取り方を伝えていきたい。二つ目に治療や生活の中に養育的視点を取り入れていきたい。三つ目に環境整備に力を入れ、自分たちで整備していく文化を築き上げていきたい。これらのことを実行しながら、目配り・心配り・心配りを大切にし、お互いがお互いを思いやりながら、それぞれが育ち合えることのできる施設を目指していきたいと考えています。

中日青葉学園は一つ！「あおば館」「わかば館」「三つ葉」がお互いに支えあって地域の拠点となり、誰もが気軽に集えるような、暖かくて楽しそうな「中日青葉学園」にしていきたいと思っています。

倉橋あおば館館長就任挨拶



この度あおば館館長に就任いたしました倉橋幸彦と申します。よろしく願っています。ここで少し、私の経歴と、しばし離れていた間の社会的養護に対する気持ちを、挨拶に代えて紹介いたします。

中日青葉学園にはご縁もあり、2000年から12年までケアワーカーとして勤めておりました。先輩職員、愛知県内の他施設の方々には、施設養護に勤める者の「気概」をご教示いただき、育てていただきました。

しかし、家庭養護に挑戦したいとわがままを言って退職し、ファミリーホームくらちゃんハウスを開設しました。家庭養護を経験すると、見えてきたものがありました。それは、中日青葉学園が培ってきた子どもたちへのサービス、地域や社会への貢献の高さです。中日新聞社会事業団という大きな母体に恵まれ、その恩恵の元で私も子どもたちも育ってきたのだと痛感したので。家庭養護こそ世の光に」との思いに駆られて日本ファミリー協会の事務局長も勤めました。しかし、家庭養護でできる子どもへのサービス、社会貢献はミニマム。家庭養護の制度と比べ、「施設養護が戦後

より担ってきた社会的養育の貢献は高く、専門性に満ちていた。一度、施設養護を離れたからこそ、感じ得たことです。「もう中日青葉学園に戻ることはない」と思っておりましたが、2021年より再就職する機会をいただきました。ファミリーホームも継続中です。施設養護と家庭養護に身を置き、施設養護と家庭養護協働型の社会的養育を探求したいと考えております。家庭養護の実践を少しでも新しい養育の形として還元し、中日青葉学園に恩返ししたいつもりです。子どもたちが夢や希望を持って未来に羽ばたける社会的養育を目指します。

中日青葉学園は、児童心理療育施設わかば館と、異なる体系の複合施設です。そこに今年、分園型小規模グループケア施設「三つ葉」として、1月に女の子用の「さくらの家」、4月に男の子用の「ポプラの家」が加わりました。私がこの世界に飛び込み28年。児童福祉を取り巻く環境は目まぐるしく変化しています。私が就職したばかりのころの青葉学園は、児童福祉法改正前の虚弱児施設という大舎の形態で、子ども

三つ葉開設



中日青葉学園は、児童心理療育施設わかば館と、異なる体系の複合施設です。そこに今年、分園型小規模グループケア施設「三つ葉」として、1月に女の子用の「さくらの家」、4月に男の子用の「ポプラの家」が加わりました。

私たちが本来的に必要とされている社会的養護を実現できる環境だと考えています。様々な事情があるから施設で生活しなくてはならない、とばかりのころの青葉学園は、児童福祉法改正前の虚弱児施設という大舎の形態で、子ども

たちも不登校の子が多く、今とは全く違うものでした。平成15年に現在の複合施設となった際、わかば館の配属となりました。児童養護施設で8年間の経験があったものの、療育施設での援助は、児童心理の必要性、保護者への対応、医療施設との連携など、今までとは違った難しさがありました。また、時代の変化とともに入所する子どものケースも多様化し、複合施設の必要性や療育施設の大切さを身をもって体験しました。

三つ葉は、これからの児童福祉に必要とされている社会的養護を実現できる環境だと考えています。様々な事情があるから施設で生活しなくてはならない、とばかりのころの青葉学園は、児童福祉法改正前の虚弱児施設という大舎の形態で、子ども



しかし、三つ葉の職員たちは、それを補うほどの大きな愛情と理解をもって、子どもたちと過ごしています。



もたちが本来過ごすべき形の生活に、どれだけ近づけるのか。全く同じにはできないかもしれませんが。（早崎）

地域社会に溶け込んだ「三つ葉」として、まだ手探りですが、これからも子どもたちの笑顔を増やすお手伝いをしていきたいです。（早崎）